

## 洋書輸入協会会報

VOL. 21  
NO. 12

(通巻248号) 昭和62年12月

## 理事会報告

10月27日(火)

## (一) 藍沢ビル明渡し

家主である相武住宅の社長巻口泰治氏から明渡し問題について説明をきいた。同氏は藍沢ビルは昭和8年に建設され、老朽化が進み、雨漏り、暖房用配管の不調、タイルの崩落等危険となってきたので、建替えに協力してほしいが、同社としても誠意をもって対処したいと述べた。その後質疑が行われた。

## (二) 英国出版社代表团

当協会との話し合いは11月17日午後2時から行われることとなったが、会員に知らせて参加者を募ることとした。

## (三) 洋書まつり

10月16日(金)、17日(土)の両日開催された洋書まつりは、16日はあいにく雨天ではあったが、NTVで40秒間放映もされ、19社が参加して6,367冊を販売し、好成績であったことが報告された。

## (四) ダイレクトリイ1988年版

10月23日(金)開催された企画渉外・ダイレクトリイ両委員会で、ダイレクトリイについては、データにISBNをいれること、ならびにフロッピーも頒布することが決定された旨報告された。出版時期は昨年と同じ頃である。ロゴについては、募集方法、賞金などにつ

いて、企画渉外委員会と総務委員会とでさらに討議することになった旨報告された。

11月10日(火)

## (一) 10月収支計算・予算対比表

11月6日に開催された総務委員会での検討にもとづく松井幸雄氏(丸善)の報告を承認した。

## (二) 英国出版社代表团

11月17日(火)開催される話し合いについて会員へ知らせたので、参加希望者について報告された。

## (三) 藍沢ビル明渡し

相武住宅から近くに貸室があるので斡旋するとの申し出があったことが報告された。

## (四) 規約・諸規定の配布

配布文書の案について検討した。

## (五) その他

11月25日(水)

## (一) 藍沢ビル明渡し

相武住宅社員の案内で、近くのビルの二室(12坪と13坪)を視察した。

## (二) 退会

洛陽書店(関西支部正会員)の退会を承認した。

## (三) 現下の問題

現下の問題について意見と情報を交換した。

## (四) その他

|             |   |                   |                          |   |
|-------------|---|-------------------|--------------------------|---|
| 理事会報告……………  | 1 | ロンドン インターナショナル    | 洋書輸入協会史(20)……………         | 3 |
| 英国出版社代表团    |   | ブックフェア 1988 …………… | Book Review No.120 …………… | 5 |
| との話し合い…………… | 2 | 文化厚生委員会だより        | 広 告……………                 | 6 |
|             |   | アジ釣り……………         |                          |   |

## 英国出版社代表团との話し合い

11月16日から20日まで訪日した英国出版社代表团とJBIA との話し合いは、11月17日(火)午後2時から4時までブリティッシュ・カウンシルで開催された。英国側からはクリストファー・ヘルム団長以下10名、BC から2名、JBIA からは12名が参加した。

小林英一理事長代理に代って押田志行氏(丸善)が歓迎の挨拶を述べた後、日本における状況のアウトラインについて説明した。その後代表团がテーマとしている①英国書の日本市場における現況、とくに宣伝活動②英国からの文献情報の現況③追加予算の問題④テレ・オーダリング⑤ジャーナルのサブに対してマグネティック・テープを供給する問題、の五点について質疑の形で討論が進められ、相互理解を深める上で有意義であった。

## ロンドン インターナショナル ブックフェア 1988

開催日：1988年3月28日～3月30日

開催地：ロンドン市内 Olympia 2、1階～3階

ロンドン インターナショナル ブックフェア主催者の一人であるケイティ・ジェイムズ女史によれば、参加者の予約状況は順調とのことである。すでに85%の出展スタンドが予約済で、Hodder & Stoughton, Pan, CVBC, Transworld, Thorsons, Faber, Deutch, Gollancz, Penguin, Octopus GroupのPaul Hamlyn Publishing DivisionとCollinsなどが主要出版社である。

1988年度は次の14ヵ国以上が参加を予定しており、インターナショナルと呼ばれるのにふさわしい。

1. アメリカ 2. オーストラリア 3. カナダ 4. 中国
5. チェコスロバキア 6. フランス 7. 西ドイツ
8. インド 9. イタリア 10. アイルランド
11. オランダ 12. スイス 13. ソ連 14. ユーゴスラビア

これらの国の多くは、グループにまとまって出展し、そのスタンドは情報交換その他及び著作権販売のセン

ターという貴重な役割を務める。

1988年度ブックフェアの特色は、会場である Olympia 2に階が一つ増やされ、昨年より敷地の規模が大きくなっているということと、昨年より参加する出版社が増えているということである。

毎年決められるテーマ国に、建国200年のオーストラリアが選ばれており、開催日2日目の3月29日には、記念祝賀会や各種催物が予定されている。

ブックフェアに関する問い合わせ先は、

Katy James

The London International Book Fair

Oriel House 26 The Quadrant Richmond,  
Surrey TW9 1DL England

Tel : 01-940-6065

Telex : 8951389

Fax : 01-940-2171

文化厚生委員会より

## アジ釣り

10月24日(土)、前日までの晴天か当日はどんよりと曇り、降らねばよいがとの幹事の願いもむなしく、走水港から舟を出す頃にはとうとう本降りとなりました。港から約30分の釣場で、今日を楽しみにしていた天狗の面々それぞれ仕掛けを海中に投じました。今日の狙いは25～30センチ級の中アジでしたが、2時間程ねばったものの釣果はぼつぼつであまり芳しくなく、場所を移して15～20センチの小アジに切りかえましたが、この方も釣果は今一つ、雨も降り続き魚を集めるコマセを入れた桶に雨水が入り釣りづらくなったので、1時すぎに早上がりとなりました。成績は、

|    |      |     |     |
|----|------|-----|-----|
| 1位 | 洋 販  | 今 井 | 14匹 |
| 2位 | 洋 販  | 池 田 | 9匹  |
| 3位 | 大洋交易 | 中 村 | 9匹  |

## 洋書輸入協会史 (26)

洋書輸入協会顧問 相良廣明

### 26.4 フランス定期刊行物輸出組合よりサントル・デュ・リーブル・フランセ宛来信の要旨

民間貿易の再開に伴い、フランス使節団経由フランス書の輸入を肩替りしたサントルには、民間貿易と比較するとワンクッションだけ日本における経由機関が増えるという設置当初からの宿命のためか、次のような問題が起きている。

それはフランス定期刊行物輸出組合 (SYNDICAT NATIONAL DES EXPORTATEURS DE PUBLICATIONS PERIODIQUES FRANCAISES) の組合長 B・ド・ノルク氏からサントルの H・ベルナル氏へあてた1951年3月19日付の手紙にある。それには「フランス使節団が手際良く仕事をし、日本の多数の書店と交渉を持つことに成功、総額約5百万フランに及ぶ定期刊行物の注文を当組合に伝達するに至ったこと」を称えた後「日本の2～3の書店が当組合へ、サントルを経由しないで直接注文を依頼してきているが、当組合は個々の注文は断わっている。それは当組合は取次店でも輸送業者の代行機関でもないからであって、サントルに集中されなかった注文を受けることによってそのような立場になることは出来ない。」と自己の立場を明らかにしている。

その代りとして「もし日本の書店がフランスの出版社に直接しかも短期間に支払うことが出来るのであれば、直接出版社へ注文することには何の不都合もない。ただし当方としてはフランスの出版社に対し、そのような直接取引は、フランス使節団の財政的保証も、当組合の精神的保証も受けることなく、日本の書店自身の危険及び損害の負担において行われる旨を予告する。」と言っている。

この手紙の内容を別な面から考えると、フランス使節団経由の今までのフランス定期刊行物の輸入は、フランス使節団の財政的保証及びフランス使節団から依頼されたフランス定期刊行物輸出組合の精神的保証がなされていたことを示している。そしてまた昭和26年3月の段階においては、フランス側としては個々の日本の書店の支払いに不安を抱いていたということも物語っていると思われる。

### 26.5 前納金の軽減

昭和26年5月25日付の海輸第125号では、サントルに対し、従来書籍注文についてのみ1フランにつき¥0.75の前納 (Deposit) をしていたが、6月1日からは書籍は1フランにつき¥0.50、雑誌は1フランにつき¥0.75の前納を願い、またサントルから各位の注文書を本国へ郵送する場合の郵料を、注文者に按分負担願いたいとの申出があったと会員に伝えている。

しかしこの件は、同業会側からの要請もあった為か、「取扱上の不便を考慮して書籍・雑誌とも前納金を1フランにつき¥0.50とすること、及び交換レートを民貿並みに引き下げよう本国に対し要請中」と、6月20日に行われた三越におけるフランス使節団文化部岡田氏、サントルのベルナル氏と同業会の懇談会の席上で説明が補足された。

### 26.6 サントルから通産省へ説明書を提出

サントルはその成立の事情からして、外貨予算の割当てなどにおいて特別の配慮を受けていた。それは昭和26年1月16日に同業会の理事を含めた10社が、通産省、文部省、工業技術庁の担当官と会い、昭和26年度の書籍・雑誌に対する外貨割当額を懇談した際に、フランスについては年間7万5千\$という数字が出され、これにはサントルの分は含まれないと註記されているのを見ても分ることである (昭和26年1月30日付海輸第114号)。

しかしその特別扱いが通産省の中で問題となったのであろうか、サントルに対して問い合わせがなされたので、6月8日付で次のような回答文が提出された。これにはサントルのことが要領良く説明されているので、少々長くなるが次にその要旨を紹介してみよう。

#### (1) サントル設立の経緯

昨年11月までフランス書籍及び定期刊行物の輸入は在日フランス使節団により取り扱われていたが、手不足のため本事業の実行が困難の度を加えたので、フランス外務省から H・ベルナル氏にこの仕事に当るよう依頼があった。そこでサントル・デュ・リーブルを同氏が設け

たが、このサントルは、フランス使節団の管理下でフランス書籍及び定期刊行物輸入の実務細目に従事するものである。

## (2) 注文書の処理

日本の書籍業者からサントルに注文書が提出されると、これをフランス外務省（文化事業部）に送る。同省は書籍はメゾン・デュ・リーブルに、定期刊行物はフランス定期刊行物輸出組合に注文を処理させる。そしてこの二つの組織が書籍の仕入、雑誌類の予約、出版社への支払い、注文品の日本向け送り出しに当る。

## (3) 支払い

注文品受渡しの際、日本の書籍業者からサントルに対し支払いが行われ、この入金はフランス使節団へ移される。この金額の相当額が、フランスでフランス政府から前項の二組織へフランス貨で支払われる。

## (4) サントル取扱いの日本書籍業者は次の通り

丸善、三越、白水社、教文館、紀伊國屋書店、福本書院、エンデルレ書店、日本評論社、国際書房、東貿商会、原書店、日進堂、白木屋、海外出版貿易、南江堂、緑書房、北荘美術、明治書房、欧明社、葵書房、梅田書房、日本出版貿易、明幸社、大丸、東光堂、中井書院、三笠書房、旭屋書店

—以下略—

この文書に対し通産省から係官がサントルに派遣され更に説明を聞いた結果、サントルの業務運営システムを了解したこと、為替管理上に更に問題があるかどうかはなお研究すること、原則的に何ら問題はないと考えるが、これ以上詳細検討の必要があれば日本政府（通産省）と在日フランス使節団との折衝に依ることとなろうなどということが、その係官からサントルへ伝えられた模様である。

## 26.7 その後から昭和27年まで

昭和26年12月18日には、サントル開設1周年を記念してフランス書取扱業者との間で懇親会が開催されている。昭和27年に入ると3月18日にまた打合せが持たれ、その様子は3月22日の同業会懇談会で次のように報告されている（3月26日付海輸第6号）。

## 記

去る18日、フランス図書において懸案中の換算率を左の通り改定、同日以後入荷のものに適用される旨報告がありました。

1 fr.=¥1.03 即 ¥100.-=97fr.

(旧 1 fr.=¥1.12 即 ¥100.-=90fr.)

尚レートも民賃並になったので各位の御協力をお待ちする旨付言がありました。(以上)

その後同27年には自動承認制が実現し、民間貿易が一層やり易くなってきたので、9月には理事会からサントルへ、前納金 (Deposit) を廃止するよう申し入れるなどのことがあったが、その他には大きな問題がない。

昭和28年に入ると、サントル側から同業会と共同主催のフランス書展開催の件が提案されるが、この件はまた改めて述べることにしよう。

## 26.8 サントルの人人

サントルは、最初日本橋、次に青山一丁目の新外映というビルの中、最後は日仏会館(?)にあった。ベルナル氏は大柄で太目の方であり、日本女性を夫人としている程の親日、知日家であった。平素からブドー酒が好きで、昭和33年暮に急性肝炎が何かを起して入院、翌34年の正月休みのうちに逝去された。葬儀には人柄のためか同業会からも多数の参列があった。

大島辰雄氏は、その後美術評論などの仕事をされていたが既に逝去。今村百合子氏は、当時すでに大正時代の有名な弁護士の子息であり大学教授の今村学氏と結婚しておられたが、現在も御健在である。

## 27 昭和26年当時の換算率及び販売価格について

昭和26年1月初めのある大学の調査によれば、外貨の換算率（売為替であろう）は次の通り。

|         |           |           |
|---------|-----------|-----------|
| USA     | 1 \$      | ……¥358.45 |
| France  | 1 fr.     | 1.02      |
| Sweden  | 1 Sw.Kr.  | 69.19     |
| Belgium | 1 B.fr.   | 7.11      |
| Holland | 1 Guilder | 9.20      |
| Swiss   | 1 S.fr.   | 63.88     |

そしてその代価は大体次のような換算で販売されていたとのこと。

書籍：

\$ ……400円

£ …… 3 分の 1 ないしそれ以上 Dis. の場合はシリ  
ング 55円、それ以下の場合は60円。

DM ……100円

S.fr. ……100円

F.fr. ……1.2円～1.5円

雑誌：

\$ ……430円

£ ……63円

DM ……110円

S.fr. ……110円

F.fr. ……1.3円

また昭和26年7月のある会社の調査によれば、米国書籍は前金拂いの場合大体\$……380円、後金拂いは\$……400円であり、極東貿易の米国雑誌は450円であるとのこと。

(続く)

## Book Review No.120

### 平凡社における失敗の研究

大原緑峯著

1987年 ばる出版 ¥1,400

とかく評判になった本である。同じ本屋業と云っても、洋書専門、和書と併業、更に出版兼業と色々あるのだが、純然たる出版業での失敗の過去を記録したものとすれば興味を惹かれる。しかも取り上げられている出版社は現在も健在で、立派に出版活動を続けているのである。本に関係ある仕事にたずさわるはしぐれとして、興味と共に少しでも仕事の参考になればとの思いが、本書に駆り立てられた次第である。

著者は34年間平凡社に籍を置き、相当な責任ある地位にあったのだが1986年に辞任している。一読して、平凡社と云う一老舗での自分の体験を通して、かなり詳細に問題を取り上げているのだが、これはあく迄一出版社の内部事情であって、すべての出版社、ひいては洋書小売業などの実状にあてはまるかどうかは疑問である。ある意味ではごく世間一般のどこにでもありそうな、内情暴露に終っている感が無きにしもあらずである。たしかに初代社長下中弥三郎氏によって築き上げられた名声と、業界での信用、それなりの資産をうけついだ後継者達がある程度の恩恵とゆとりをもって仕事にたずさわるのは当然と思われるが、それなりの失敗も当然予想される。別に失敗を弁護する積りは

無いが、無一物同然から出発した企業、小さな失敗が命取りになるような場合とは本質的に違うのである。しかしながら、過去の多くの企業の失敗の中で、一体どれだけが、謙虚に反省し、冷静に分析して世に問うているか。そういう意味での本書のユニークさ、貴重さがある。

世に伝記、一代記、社史など多くあるが、その殆んどは成功を謳歌したものだが、失敗を正直に記録したものが少ないのも事実である。失敗も一個人、一企業内だけの教訓にとどめず、成功の教訓と同様多くの人に伝えられて然るべきであると思う。

本書を公にするに当たって、取り上げた企業に禄をはんだ者としての著者のためらいや、本書を同業の出版社として出版するに当たっての決断等、さまざまな気苦労や障害があったことも記されている。将来的にはさまざまな企業が、もっと企業機密などと云うベールをどんどんぬぎ捨て、失敗も自由に公開、分析されお互に公共的な意味で再認識される時が来る事を待望する。この様な意味での本書の著者や出版社の実績を評価したい。

(教文館 K・W 記)

フランス語学、文学専攻生、大学院生に最適の新編仏語大辞典！  
最新の情報を網羅！最も使い易い5巻本で登場

新編－5巻本／フル・カラー版  
**グラン・ラルース大辞典**  
— GRAND LAROUSSE EN 5 VOLUMES —

全5巻セット価格 ￥64,400

ISBN 2-03-101330-0

☆当「グラン・ラルース大辞典」は、1987年4月に発刊され、10月に全5巻完結しました。

☆先に完結したGDEL（ラルース大百科辞典）の後を承けた当大辞典は、全く新しい  
コンピュータ編集により、下記のユニークな特色と実用性を備えます。

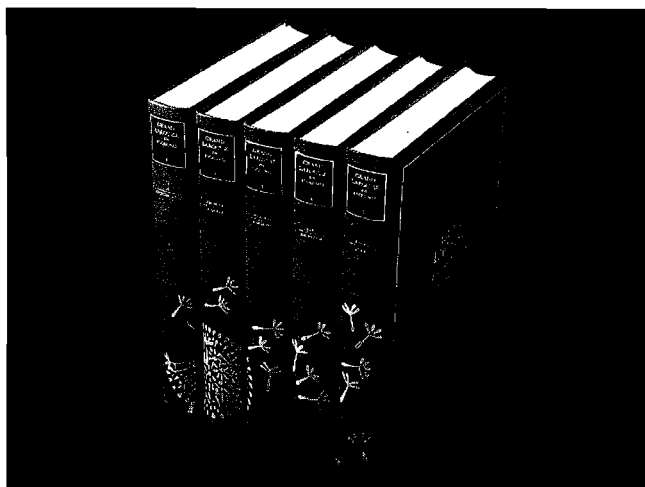
○収録語116,000語、語句と事項の説明は詳細。（固有名詞41,000語を含む）

○ヴィジュアルな魅力が最大特色。写真4,450、図解2,800、地図410は殆んどがフル・  
カラー印刷。

○語学／百科両用版、新語豊富な実用重視の編集方針徹底。

☆ハンディな装幀と巻数、手頃な価格で、学生、院生、一般読者の方に広くお奨めできます。

☆既に GDEL をお持ちの方にも、実用版として広くお奨め致します。



日本総代理店



株式会社 紀伊國屋書店

（新館）☎156 東京都世田谷区桜丘5丁目38番1号 ☎(03)439-0161

電話問合先  
(03)439-0161  
内544  
ラルース係

昭和62年12月 通巻第248号 洋書輸入協会 編集者 柴田 三夫

☎ 103 東京都中央区日本橋1丁目20番3号 藍沢ビル612号室

☎271-6901 FAX 271-6920

☎ 530 関西支部 大阪市北区芝田1-10-2 第一山中ビル

☎371-5329